2011・3・10

おーい図書館

No.146
発行 おーい図書館
代表 青木和子
松戸市牧の原1-104-406
TEL 047-311-0886

講演会

図書館ってどんなところ!!

報告 青木和子

10月16日(土)、女性センター「ゆうまつど」で開催しました。講師は、図書館情報大学名誉教授・(社)日本図書館協会前理事長の竹内悊(さとる)さん。

何年も前から、松戸でお話を聞かせて頂きたいと願っていましたが、漸く願いが叶いました。

竹内さんの講演の前に、本郷谷市長から「すべての市民が歩いて行ける距離に分館を持つという、これまでの松戸市の図書館政策は評価するが、今後の新しい構想を考える時期に来ている。」との挨拶がありました。私達も大いに期待したいと思います。

講演抄録

2008年刊行の「おーい図書館」の会報合本は、これまでの活動の歴史であり、「図書館」についての考え方の宝庫だ。この合本刊行のきっかけとなった「図書館を考える会(守谷市)」の会報合本を作った当人(注竹内さん)としても、大変嬉しく思う。

本日は、昨年の院内集会での話(会報141号に掲載)に加えて、皆さんが松戸市の図書館について考える時の材料として、私見を述べたい。(注話の中に出てくる「図書館」には、公立図書館・学校図書館を含む)

⊙図書館についての考え方

50年前の図書館は、古い本ばかりで読みたい本が無い、カビ臭いところ、入館すると職員にジロリと見られる、とても感じの悪い所だった。

1950年の図書館法施行後は無料になったが、それまでは有料で、手続きが面倒だった。本の保存が中心であり、図書館サービスという考えは無かった。

現在の図書館の新しいイメージは、「良いところだが、よそよそしく、昔のクラシック喫茶みたいなところ」「生きることの素敵さを味わわせてくれる場所、魂を癒すところ//命の森」と云ってよい。

アメリカの図書館のポスターには「ちょっと待って!自殺はやめて図書館へ」とある。

(注次頁の挿し絵参照)

Library Instruction, by Ann F. Roberts, 1982

日本では、50年かかって「保存」から「貸出し」へと大きな進歩を遂げたが、そこで停滞しているところが多い。その次の段階へと進んでほしい。

⊙図書館とは何をするところ？

図書館は、人の自立を援助するところの一つである。本やその他の資料を通して、市民が「自分づくり」をするのを援助し、学校図書館は授業を助ける役割を持つ。理解や興味は一人一人違うのだから、100人の利用者には100通りのサービスを提供すべきだ。

教えこんだり押しつけたりするのではなく、本やその他の「考えるための材料」を使って、自分を育てようとすることを援助する。そして、それぞれが求めるものを探し出せる力を育て、その人の中にある素晴しいものが育つのを「待つ」のが、本当の教育だ。

「考えるための材料」とは、人間が感じ、考え、行動したことの記録であり、図書館で集める本やその他の形態のものを指す。図書館サービスとは、その「考えるための材料」を、専門知識とセンスと経験の蓄積と人々のために役立つ仕事をしたいという強い意志を持つ「司書」が、人に手渡しをする活動のことである。（㊟司書が持つべき資質は、4～5頁の図を参照）

（公立図書館には、学校図書館の支援という大きな役割がある。前述したような仕事の実現とその蓄積によって、一人一人の様々な問題解決（挫折を含めて）の役に立つ学校図書館や公立図書館が生まれる。そういう図書館を持つことは、学校や自治体の健康さを示すものではないだろうか。

⊙今後の日本の図書館の目標

2006年、日本図書館協会は、国及び地方自治体の教育・文化・図書館行政に責任を負う方々、国会及び地方議会の議員、マスコミ関係、図書館に関心を寄せる多くの方々を対象にして「今後の日本の公立図書館の目標」を提案している。

その内容は、市町村の図書館は概ね中学校区に一館整備する。（松戸市は中学校と同数）しかし、日本の現状はG7中最低。（全国の中学校数は約1万1千、公立図書館数は約3千）

地域の図書館の延べ床面積は800

㎡以上、蔵書は5万冊以上が必要。専任職員は3人以上を配置する。

市町村立図書館の運営経費(人件費を含む図書館年間総経費)は、市町村の一般会計歳出総額の1%以上を措置し、資料費はその20%(一般会計総額の0.2%)を充てる。

などの提案がされている。

⊙松戸市の公立図書館

1970年代以降、「市民一人一人に行き届いた図書館サービスを」という方針のもとで、20館を建設してきた。その中で、図書館サービスのための職員の姿勢と工夫が見える。

しかしながら、2008年度の住民一人当たりの年間貸出冊数は4.11冊。(全国平均は5.5冊)

本館と分館(19)の内容は次の通り。

開館年	図書館名	延べ床面積(㎡)	蔵書(冊)
'72	常盤平分館	178	35
'74	本館	1932	168
	稔台分館	123	18
'76	小金原分館	188	36
	矢切分館	102	18
	古ヶ崎分館	79	14
	馬橋分館	66	16
'77	五香分館	71	18
'78	小金分館	342	34
	明分館	97	21
'79	六実分館	146	21
'80	東部分館	123	15
'81	新松戸分館	154	27
'83	馬橋東分館	96	15
'84	小金北分館	80	14
	松飛台分館	80	14
'86	二十世紀ヶ丘分館	90	16
'88	八柱分館	103	17
'91	八ヶ崎分館	93	16
'96	和名ヶ谷分館	184	20

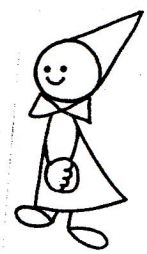
⊙松戸市立図書館の今後(私見)

中学校数と同数の分館を持つことは、先人の先見性を示すものと、高く評価すべきだ。

しかし、'70年代と今日とでは、公立図書館の状況があまりにも違う。'70年代の画期的な発想は、この40年間で、地域住民の読書意欲から取り残されてしまったのではないだろうか。

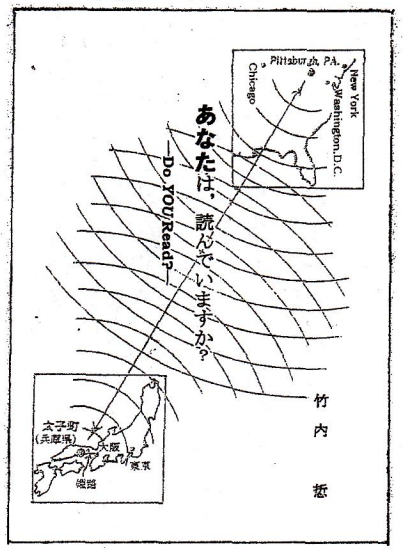
今後の松戸市立図書館網の計画は、先見性の長所を生かし、更にそれを現代的に発展させるべきかと思う。

住民、図書館利用に障害のある人々、学校教育・社会教育関係者、学校図書館関係者、公立図書館司書、議員、市当局の人々が、図書館について何を望むのか、今何ができるのか、遠くの目標は何か、などの考え(税金も)を持ち寄り、まとめ、分け合って、松戸で育つ人・暮らす人たちの自分づくりのための図書館を実現できるように、切に期待したい。



★講演の最後に竹内さんが紹介して下さった「あなたは読んでいま

すか？I DO YOU READ？」（竹内悊著）は、すべての図書館に関心のある方・図書館関係者に読んで頂きたいと思いました。ご希望の方は、「おーい図書館」までご連絡下されば、貸出し致しますので、どうぞお申し出下さい！



次に「アメリカ図書館協会児童サービス部会ニューズレター」に掲載された挿し絵を紹介します。尚、この中の「教育委員会へのお願い」は、特に竹内さんがご自身の思いを付け加えられたものです。

「子どもの読書」のために働く人たち、その条件

児童図書館員にささげる

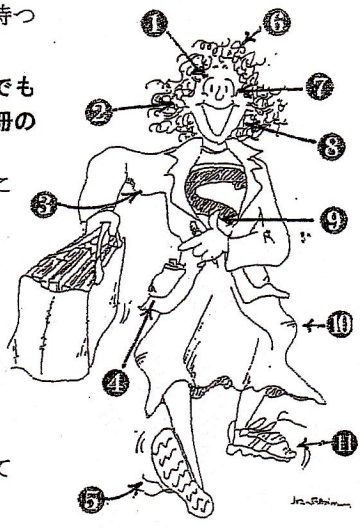
アメリカ図書館協会児童サービス部会ニューズレター　1994年第4号所載
ジョーン・ロビンソン作・画　（竹内　悊・訳　太字は原文、明朝体はその説明）

1. 子どもの本について、知る努力をする

① **目：どのページにもすぐにウォーリーを見つける** ⇒子どもの本についてのセンスを持つ

⑥ **頭：必要に応じていつでもナルニア国ものがたり7冊の順序をきちんと書ける⇒** 子どもの本の知識を豊富に

⑦ **鼻：いつでも勉強につっこんでいる。でも後書評誌を37冊読まなくちゃ！：** 本は自分の思いや感覚だけでなく、専門の書評誌の記事を読み比べて自分の意見を持つ



2. 人と本のかかわりについてよく知っている

② **耳：ティーンたちの言葉を英語に翻訳⇒** それだけ子どもたちの生活を知っている（英語のはずなのに、英語に翻訳という。そこに、わかりにくさへの嘆息と、それをユーモラスに表現するセンスがある

④ **大きなポケット：見つけたものは何でも入れる：野球選手のカード、ジグソーパズルのピース，宿題も⇒** 落としたのはだれか、すぐ見当がつくほどに、子どもたちを知っている。もちろん、みんなをファースト・ネームで呼べる

⑦ **鼻：**子どもたちのことを知っているから、書評誌を読む手がかりが得られる

3. 人と本とを結びつけるための柔軟な姿勢

⑧ **ほほえみ：困ったなと思う本を要求されても，ほほえみかえせるゆとり⇒** 図書館の選択基準以外の本を要求されたり、図書館にある本を強く非難されたりしても、カッとしないで、じっくりと話し合う

⑪ **ランニング・シューズ：赤ちゃんのためのお話の時間から、予算委員会に走っていって予算を要求 ⇒違う仕事にすぐ切り替えができる、気持ちの広さ、柔らかさを持つ**

4. この仕事を通して、人のために働くという強い意志と健康

③ **力瘤：どこに行くのにも27冊の本を持って行ける強さ** ⇒ 今夜、全部読むために

⑤ **生活能力：給料が安くても生き抜く**⇒図書館専門職は修士課程で図書館情報学を学び、修士号が必要。給料は高くはない。この仕事で生きたいと強く望む人が選ぶ職業

⑨ **親指：何でもかかってこい！**⇒困難に負けない、強い意志と体力

5. いちばん大切なもの

⑩ **ひざ：小さい子と目と目とを見合わせて話せるように、いつでもすぐに曲げられる** ⇒ 対等の人間同士という意識。エライ人が幼いものに上から教え込むのではない。

教育委員会にお願い：図書館で働く人を採用するときは、司書資格とともに、この膝を持つ人を選んでください。 図書館は、人によって、良くも悪くもなるものですから。

竹内さんの講演を聞いて

今日はありがとうございました。話がとても面白く、図書館に親しみを持ちました。

子供達のため、また老人のため、これから大いに助けになる図書館が欲しいと思います。

とても柔かい語り口で、わかりやすく聞かせて頂きました。

図書館とは、サービス対象が100人いれば100通りのサービス提供―肝に銘じます。

先生のお人柄、図書館に対する思い、情熱、学識の素晴しさに触れ、久しぶりに名講義を聞いた学生のような感動をおぼえました。

「おーい図書館」の活動も、実現のないまま足踏み状態です。

また、財政難などの理由をあげ、図書館は放置されています。

今の段階で、分館の充実を含め、私達が目指す図書館を実現できる方法や、私達の気持の持ち方などもお聞きしたかったです。

竹内さんのお話は、ほんの短い時間であっても、いつもたっぷりと心が満たされます。

図書館の職員の方々と、この思いを共有できたら、どんなに嬉しいかと思います。

図書館っていいなー！図書館員さんっていいなー！

でも、図書館で働いている人は、50年前の人々のように、顔色が悪く元気がありませんね。

竹内氏は、ご自身の作られた詳しく的確な「レジュメ」に添って話されましたが、わかりやすく胸に落ち、強く励まされました。温

かいお人柄が伝わって、元気が出てきました。現状を生かす方法も必要だと気づきました。

竹内氏の「レジュメ」を、多くの人に読んで頂きたいと思いました。

18年前、青少年の非行を思って、若者が集まれる楽しい図書館が欲しいと思い、「おーい図書館」の提案に加わりました。

今日、図書館は「国民の自立を支援する」ことを目的としているという先生のお話を伺って、目を開かされる思いでした。図書館の役割は、時代と共に少しずつ変わっていかざるを得ないと思いますが、変わらないことは、「自立を支援する」ことですか。

現実の図書館は、住民のニーズに合わせて、自治体の懐具合によるのでしょうが、住民としては、精一杯要望を出して、この町にいい図書館が実現しますよう、祈ります。

待ち望んだ竹内悠先生の講演会でした。

①夢のような2時間・まさしく「魂を癒す命の森」ー感謝!!

②あたたかいお人柄に、輝くセンス。気品あふれる立ち居振る舞い。演壇から演台と共に一段下に下りられて、2時間「リン」とお立ちのまま、一人一人の目を見て話され、私共はイスに腰をかけ、心地良く、うっとり…

③素直に本物の学びを持続、努力したいと強く思いました。

④会報合本について「宝庫」と評価して下さり、希望と勇気を頂きました。

⑤終始、時間配分が完ペキで、ゆとりの中、心の中にストンストンと落ちる、楽しく生きていくヒントをいっぱい頂き、合点がいき、理解できました。(敬服しました。)

⑥シメで、最後に常世田さんからの「本質へ導いていく質問」には、さすが竹内先生は笑顔で、名著「あなたは読んでいますか?」から引用して、ズバリ的中。「ラッキー!!」と心の中で拍手しました。(具体的で、いろいろ目に浮かびました。)

⑦竹内先生のお声は物静かで深く響き、心に浸み入り広がりました。

この次はぜひ、大好きな絵本を読んで頂けたら…と思います。

いつでも、どこでも、どなたにでも、すぐに曲げられる「ひざ」を意識し、他者の中で他者と共育ちの喜びの中、真心を大切に歩んでいきます。

後記

図書館への熱い思いを、静かに語りかけて下さった竹内さん、本当にありがとうございました!!